
わがままお嬢様は魔法使い

味醂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わがままお嬢様は魔法使い

【Nコード】

N2249Y

【作者名】

味醂

【あらすじ】

いろいろパロディする予定です

予定は未定（笑）

- 桜の木 -

大きな桜の木があった。

大きな大きな、とても立派な桜の木だった。
樹齡何千年も生きた木には魂が宿るらしい。

幾つもの困難にも屈しず、ぴんとまっすぐ背筋を伸ばし

幾つもの時代を、人々の夢を包み込むように、どこまでも枝場を広げるその様が

僕は大好きだった。

桜吹雪くにはまだ早い季節だった。

あの時も僕たちはあの木の下で遊んでいた。

「おじょうさま！お願いですから、お降りになってください！おじょうさま！」

猫っ毛の髪を風に揺らして、少年が叫ぶ。その頬には、はらはらと涙の筋がつたった。

「おだまりよ！よわむし！なきむし！」

少年の遙か頭上を甲高い声が返ってきた。

「お願いですから！おじょうさま！」

「うるさい！泣き虫は大っ嫌い！」

強い口調で窘められ、少年は何も言えず俯いた。両手で涙を擦っても、後からも後からも涙は滲んで止まってくれなかった。

風が吹き、さわさわと静かに葉を揺らした。

少年はしくしくと泣き続けた。

大きな瞳を不安げに揺らして頭上を見上げると、

その漆黒の髪を新緑の翠に染まった木漏れ日が、艶やかに輝かせた。

眩しい翠に目を凝らしたその先に、小さな細い光を見つけて、はっと息を呑んだ。

それは、うーんと手を伸ばして何かを掴もうとしていた。

「もうすこし・・・もうすこしなの・・・」

そう、それはあの子の小さな腕だった。僕からは何も見えないけれど、その腕の先には

僕の髪のようにまっくろな子猫がいて・・・

あの子なら大丈夫だ、いつもそうであったように・・・あの子なら・・・でも、

僕はそこから決して目を離さずに、ぎゅっと両手を握り締め、祈った。

どうか・・・神さま・・・あの子を、僕の大切な女の子を・・・どうか・・・

どうか、守ってください……

バキツという音が鋭く心臓を抉った。

っ……!!!

声にならない悲鳴、音のない世界で何かが落ちてきた。それが何かだなんて、信じられないし、信じたくない……!

僕は驚愕の目を見開き固唾を呑んだ。……涙はいつの間にか枯れていた。

……そんな、神さま……

・・アノ子ナラ、大丈夫ダ、イツモ”そう”デアッタヨウニ、アノ子ナラ……

そんな!!!

少年は駆け出した。両手を天高く上に突き上げた。加速する鼓動に心臓が潰されそうだった。

次の瞬間、バツと枝葉が開かれ、そこからたくさんの陽光が降り注いだ。

そして……それは、現れた。ぱっと飛び込むように現れた一際眩しい光に僕は目が眩んだ。

「いーしんっ！」

ふわり、ふわりと舞い落ちてきた彼女よりも、僕は、輝く太陽のようなその笑顔に、

「いーしんっ!!」

彼女はまっすぐ僕の胸めがけて飛び降りた。不思議にゆっくりだった。

そっと右手を僕の頬に手を伸ばして、彼女は少し困ったように上目遣いに笑った。

僕はいつの間にか、また泣いてしまっていたようだった。

「ひっく・・・っからっ・・・ぼっ、くが・・・」

「なによ？」

ぼろぼろと大粒の涙が流れる・・・ああ、だめだな・・・僕は・・・しゃっくり上げながら紡いだ言葉がばらばらになってしまう。

「・・・ぼくがっ・・・っ!・・・っ!・・・」

彼女は頬を撫でる手をするっと僕の方に回して、おそらくキスをした。

「・・・泣き虫」

そう言って、悪戯っぽく笑った彼女を僕はどんな顔で見つめていた

だろう。

お姫様抱っこした彼女のお腹の上で、子猫が「みゃあ」と甘えるように鳴いた。

”降ろしなさい”と目で命令する彼女を僕は”離すものか”と心の中で反抗した。

桜吹雪くには早い季節だった。

桜よりも淡く、恋というよりは酸っぱすぎるあの感情を、僕はなんて呼ぶのだろう。

ちゃんと背筋を伸ばして、広々と枝葉を伸ばすあの大きな木は、まるで彼女のようで。

僕にはとても眩しすぎて。

僕はあの木のようになりたかった・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2249y/>

わがままお嬢様は魔法使い

2011年11月16日17時06分発行